

# 恵比寿、大黒、目をさませ

—おめでたづくしの『大黒舞』—

節分の夜、豆まきの唱えごとといえば「鬼は外、福は内」。長野県などではこれを繰り返したあと、天井に向かって豆を打ち、「恵比寿、大黒、目をさませ！」と唱えるそうです。

御伽草子の『大黒舞』は、まさに恵比寿と大黒に見込まれ、幸福になった男の物語です。御伽草子とは十四世紀から十七世紀に流行した短編物語のこと、多くは美しい挿絵を伴った絵巻や絵本のかたちで残っています。女性や子ども向けに書かれたと思われませんが、作者はほとんど分かっていません。

『大黒舞』も作者不明ながら豪華な絵巻で、当館の貴重書に指定されています。『室町物語集 下』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九二年）に全文が収録され、全国の大学図書館等に備えられています。当館HPからカラー画像も公開しています。

『大黒舞』の主人公は「大悦の助」という親孝行者です。何ともめでたい名前ですが、実は貧乏で親を満足に養えません。京都清水寺にお参りすると、観音からわらしべを授かります。そこから昔話「わらしべ長者」そっくりの物語が展開し、彼はわらしべを梨、衣、馬と次々に交換し、ついには黄金三枚を手に入れるのです。

さて、節分の夜のこと。大悦の助の屋敷に、彼の親孝行ぶりに感心した大黒が訪れます。大黒から数々の宝物を頂いていると鬼が襲ってきますが、大黒は「鬼は外、福は内」と唱えて煎り豆をまけばよいと教えてくれました。早速、大悦の助は縁側から勇ましく豆をまき、鬼たちは慌てて逃げ出しました（図1）。座敷の奥には福々しい大黒、傍らに大悦の助の両親が座り、使用人たちはご馳走の準備に余念がありません。一家の豊かさが伝わってきます。

ほどなく恵比寿までが屋敷を訪れ、賑やかな宴や相撲大会が開かれました（図2）。大黒と



図1 豆をまく大悦の助



図2 大黒と恵比寿の相撲

恵比寿が一騎打ち、周囲では大黒に仕える鼠や、恵比寿に仕える海のものたちが応援合戦、といったところでしょうか。

そこへ盗賊たちが来襲しますが、今度は大黒たちが追い払ってくれました。めでたい噂は朝廷にまで届き、大悦の助は中納言の姫君と結婚して栄華を極め、大黒は喜んで舞い歌った物語は結ばれます。

おめでたづくしの『大黒舞』は当時の福神信仰をよく反映し、富貴繁盛という庶民の夢を体現していますが、すべての幸福は彼の孝心が招き寄せたものでした。この絵巻は、孝行の大切さを読者に教える役割も担っているのです。

（齋藤真麻理）